

令和8年度第1回宮城野区区民協働まちづくり事業 評価委員会 令和7年度企画事業実績報告及び事後評価 議事要旨

日 時：令和8年5月26日(火) 18時30分～20時40分
場 所：宮城野区中央市民センター3階 第3会議室
出席者：大西委員長、安部副委員長、眞野委員、千田委員、
まちづくり推進課

1 開会

※入れ替え制での開催のため、委員長挨拶・評価委員の紹介・概要説明は省略。

2 事業報告及び質疑応答

(1) すずむしの里づくり事業（実施主体：すずむしの里づくり実行委員会）

＜質疑・意見＞

委 員 高齢化により活動する方がいなくなることが心配なため、何か対策を聞きたい。なるべく若い人に関心を持ってもらうため、夏休みに中学生や高校生に手伝ってもらったと報告があったが、そのような人が離れていかないようにしていくしかない。

説明者 年間1人でもいいから、継続してくれる人が出ればいいと感じている。実行委員とは別に協力者がおり、その内の1人は岩切小学校出身でスズムシの授業を覚えていたことがきっかけとなって昨年1年間事業に関わってくれた。岩切祭りで、スズムシをモチーフにしたアクセサリー作り体験コーナーを設け、非常に好評だった。今年は就職したこともあってブースの実施は難しいと思うが、市民センターの職員となったとのことで、今後も縁は続いていくと思う。何らかの形で繋がってもらえればありがたいと思っている。

委 員 スズムシの出前授業等のイベントは、例えばみやぎの・まつりの会場等でPRはできないのか。

説明者 みやぎの・まつりの時期を考えると難しい。スズムシが一番鳴くのは6月にふ化して2か月後、8月のお盆の頃である。時期を遅らせてふ化させる方法もあるが、気温が15度を下回ると鳴かなくなってしまう。岩切市民センターの改修後はスズムシ室にもエアコンが設置される予定なので、それで調節すればふ化の時期を前後させられるとは思いますが、早すぎると成長しなくなるので、なかなか難しい調整である。

委 員 ボランティアに参加した子どもや事業に接した子どもから、どのような感想や言葉をもらっているのか教えてほしい。

説明者 多くの学校からスズムシの授業の感想をもらう。一番印象に残った言葉が多く、「スズムシが冬眠することは知らなかった」「前足のところに耳があることに驚いた」「6月に生まれて10月に死ぬなんて寿命が短すぎる」など、多種多様である。スズムシを人間と同じような感覚で捉えていると、違う部分を知ったときに様々な意味でショックがあるのだと思う。また、講師が違っていると強調する箇所も少しずつ変わるので、印象に残るところもそれぞれ受け取り方があるのだと思う。

委 員 子どもたちはとても素直だから、その時々が発見がダイレクトに感想として表れてくるのは、大変良いことだと思う。中学生がボランティアとして参加したとあるが、例えば学校と連携してクラブ活動と結び付けた取り組みができれば、継続的な関わりにつながると思う。そうすれば、子どもたちも単なる一時的な感想で終わらずに、もっとスズムシに対しての愛着や「いつか自分も里親になろう」という気持ちを育むことができるのではないかな。

成長と一緒に常に頭の片隅にスズムシがいるようなこどもが 100 人のうち 1 人でもいれば十分だと思うので、ぜひ学校との連携を働きかけてみてほしい。

- 委員 みやぎの・まつりでの PR は難しいという話があったが、科学館等にはボタンを押すとその虫の鳴き声が聞こえるという展示がある。時期的にスズムシの実物の展示はできなくても、録音した泣き声や活動内容を紹介するようなパネルを作成し、次年度の里親や活動メンバーを募集するというのも、PR として可能なのではないかと思った。
- 説明者 令和 4 年度に仙台市教育委員会から委託を受けた教員が作成した 15 分程度の教材動画が文部科学大臣賞を受賞し、仙台メディアテークのホームページから視聴できるようになっている。それを活用してアピールすれば、スズムシの鳴き声を聞いてもらえると思う。

（２）地域はっぴい子育て支援事業（実施主体：みやぎの区民協議会子育て支援部会）

＜質疑・意見＞

- 委員 スキルアップ研修でパパもママも楽しめるイベントの事例紹介がされているが、実際どれくらいの父親がイベントに参加するのか。
- 説明者 令和 8 年度内にイベント開催するために現在取り組んでいることとして、部会員の所属している児童館等で、どれくらい父親向けイベントの需要があるのかを計るアンケートを取っている。開催日は平日が良いのか、土曜日の方が集まるのか等、それをもとにイベント内容を検討していきたいと考えている。
- 委員 自分の年代だと父親が育児に介入するというのは考えにくかったが、最近の傾向としては父親も母親も同じで、どちらかというと父親も積極的に育児に関わる世帯が多くなっている。ぜひ父親に向けて計画しているものを進めていただきたい。
- 委員 はっぴいママカフェは土曜日に開催しようと思えば可能なのか。
- 説明者 検討しているところであり、土曜日に使ってもいい施設もあるので実現は可能。ただ、部会員が所属している児童館の行事等と重なることもあり、調整が必要である。
- 委員 土曜日に開催できれば、父親も母親も一緒に参加できる方が多くなりそうかなと思った。
- 委員 事業目的として掲げられている育児孤立の解消に関して、今年度から具体的始めたことはあるか。
- 説明者 今のお母さんたちは Instagram で情報を探している方が多いので、なかなかイベントに向くのが苦手な方にも興味を持ってもらえるよう、今年度から新たにみやぎの区民協議会で開設した Instagram アカウントで情報提供をしていこうと考えている。
- 委員 最近は乳幼児の保護者が働き始めるのが早くなっており、どこの児童館でもなかなか小さなこどもが集まらないうち聞いている。とはいえ、多くの方がインターネットで情報を集めていて大丈夫なのかなと思う一方で、オムツ外しやトイレトレーニングの始め方など、昔と変わらない疑問や不安を抱えている方も少なくないということは自分も実感している。色々と予定が重なると参加者にとって休みを取ることも難しくなるので、例えば土曜日に開催したり、子育て支援拠点で行事をしているところに少し関わらせてもらったりして、ネットワークの生かし方の方向性を少し変えてみてはいかがか。現状だと、部会員のスケジュールに合わせているような印象があるため、その点を工夫したらよいと思う。

(3) おらほの公園草刈隊支援事業（担当課：宮城野区公園課）

<質疑・意見>

委員 私も町内会の公園の草刈りに頭を悩ませている。年に1回は行政の方で草刈りをしてもらっているが、対象となる宮城野区の公園の数はどれくらいあるのか。また、報告書に述べ実施回数107回とあるが、公園数はもっとあるはずである。全部の公園で実施しているわけではないのか。

説明者 正確な数は把握していないが、宮城野区は他区と比べても管理する公園が多いと認識している。すべての公園で実施しているわけではない。

委員 町内会等が自分たちで管理している公園の件数が分かると良いと思う。このような情報提供をしていかないと、自分たちでやらずに行政に任せきりになる可能性がある。草刈機のかべ貸出台数253台となっているが、こんなにたくさんあるのか。

説明者 本事業は草刈機4台で対応している。企業等では自己所有している草刈機を使用して協力してもらっているところもある。

(4) ご近所ふれあいステップアップ事業（担当課：宮城野区区民生活課）

<質疑・意見>

委員 東仙台中学校周辺をモデル地区にしていると思うが、なぜ地域包括支援センターだけ中学校区とは異なる区域から参加しているのか。連携のしやすさや今後の展開を鑑みると中学校区での連携が効果的であるため、その地域を担当する東仙台地域包括支援センターの方が良かったのではないか。

説明者 キャンペーン実施場所である七十七銀行東仙台支店と仙台燕沢郵便局の双方が、燕沢地域包括支援センターと関わりがあったのでお声がけした。

委員 東仙台地域包括支援センターも、中学生と一緒に高齢者サロンなどの取組みを始めているので、ぜひその地域を担当している地域包括支援センターを念頭に置きながら、近隣の他のセンターなどにお声がけをしていただきたい。その地域の中では団体同士での関係性が築かれているため、その繋がりを大事にしていくと、地域全体で協力していこうという空気が生まれやすいのではと思う。

委員 燕沢にも防犯協会があり、活動したくてウズウズしているので、近隣で何か取り組みがある場合は、声をかけていただきたい。今年も燕沢防犯協会の総会をやったが、どんな活動をして良いかよく理解していないようだった。

説明者 防犯がメインの活動であれば、キャンペーンでもパトロールでも、どのような形で良いと思う。例えば月1回日にちを決めてパトロールするというような形でできれば良いのでは。また、今後防犯協会の方から地域に接触する機会があるので、話をさせていただきたい。

委員 令和7年度は中学生と受講する講習会はできなかったとのことだが、今後復活する見込みはあるか。

説明者 学校の都合等を鑑みて検討する。

(5) みやぎの地域力向上支援事業（担当課：宮城野区まちづくり推進課）

<質疑・意見>

委員 今後の展開として、駅東エリアから範囲を広げ、新たなエリアにも焦点を当てると記載があるが、現時点で具体的に考えていることはあるか。

説明者 現時点では確定していないが、令和7年度は岩切地区でまち歩きを実施しようとしていたものの、急遽実施が難しくなった。理由としては、発着地点およびミーティングの会場と考えていた岩切市民センター改修工事で使用できなくなったこと、また、予算上の都合に

より、公的施設で代替可能な会場を確保できなかったためである。今年度は、第1回目のミーティングが6月にあるため、そこで取り上げたい地域を聞きながら進めていく予定である。

委員 地域を広げていくことは結構大変なことだと思う。まち歩きに興味のある人は少ないと思っていたが、最近、旧新田駅の写真を探していたところ、地元学の冊子を持っている方から、その本に掲載されていると教えてもらった。何かを調べたいと思ったときに、手掛かりがあるということはとても大事なことで実感した。今後もこの事業は続けてほしいと思うが、宮城野区全域でまち歩きを実施していく場合に、現時点での課題はあるか。

説明者 1つはまち歩きを実施するための移動手段である。これまでは区役所前に集合して2時間程歩くことが多かった。岩切についても、岩切駅から岩切市民センターまで徒歩で移動できるため候補として検討していたが、そのような条件の整う地域でなければ難しい。また、遠方で実施する場合は部員の交通費の取扱いについても課題である。宮城野区は広いので、限定的なエリアのままで、例えば大人だけではない若者の視点での魅力を議論するなど、手段や方向性を変えていかざるを得ない部分もあると思う。区の事業としてなるべく広がりを持たせるという視点は常に念頭に置いているが、実現可能性という点では、ボランティアで協力していただいている部員の方々に、どこまでお願いできるかという懸念もある。

委員 「みやぎの・アーカイ部」という名称のとおり、活動の記録を成果物として保存し、公表しているのか。

説明者 事業の中で作成したパンフレットや、まち歩きをした内容や部員が書いた記事を冊子にまとめたものなどが、いわゆる成果物として残っている。作成した目的によっては公表していないものもある。また、本事業の業務委託の中でSNSの運用をお願いしており、部員の方々が書いた記事をSNSに投稿することで、誰でも閲覧可能な形でアーカイブとして残っている。

(6) 宮城野盆踊り普及事業（担当課：宮城野区まちづくり推進課）

<質疑・意見>

委員 講師派遣実績と当日の踊り手派遣実績について、令和6年度から増えたところがあれば教えてほしい。

説明者 講師派遣で増えたところは幸町南学区連合町内会の1か所である。踊り手派遣については、原町学区民体育振興会、幸町南学区連合町内会、出花町内会、清水沼町内会が新たに派遣した箇所である。

委員 地域での祭り自体が減少していることもあり、なかなか増やすのは大変だと思うが、地道に増えているのだなと感じている。

説明者 町内会だけでなく、夏祭り仙台すずめ踊りやみやぎの・まつり、みやぎの文化祭等、イベントでの露出も地道に続けていきたい。

委員 町内会の祭りや練習会にいくつか参加させてもらうことがあるが、どうしても時期的に集中してしまうので、時期を広げて6月よりも前から実施することはできないか。ゴールデンウィーク頃から派遣事業を開始していただいて、講師が来れないから練習しないのではなく、自分達だけで練習会ができるように準備できるとありがたい。また、普及を目的とするのであれば、祭りに合わせて練習するだけでなく、年間を通してどこかで披露される機会を設けることも普及活動として有効ではないかと思うので、検討してほしい。

委員 作ったうちわが余りはしないのか。自分たちでうちわを作成している地域もあるため、う

ちわは増刷せずに、講師派遣にもっと予算を充てることを考えても良いのではと思った。

説明者 踊り手派遣の開始時期については、派遣元の実行委員会と相談させていただきたい。うちわは毎年数百枚作成しており、配布していることは積極的には案内していないが、希望するところには、先着順で部数を相談した上で渡すようにしている。

(7) 震災の記憶伝承と命を守る防災学習（担当課：宮城野区まちづくり推進課）

<質疑・意見>

委 員 災害の経験の無いこどもたちが育っており、今の高校1年生が2011年生まれの世代にあたる。そのような中で、こどもたちが伝承活動をどのように受け止めているのか、その効果を知りたい。ぜひ次回の報告の際には、こどもたちへのアンケートの結果等も紹介してほしい。

説明者 承知した。

(8) みやぎの・まつり（実施主体：みやぎの・まつり実行委員会）

<質疑・意見>

委 員 来場者の年代に偏りはあるのか。こども連れが多いのか。

説明者 みやぎの・まつりは、「ちょっとのぞいてみませんか」コーナーや自衛隊等の働く車の展示が充実していることから、他区と比べてこども連れが多い傾向がある。令和7年度については、高校生が参加することにより、これまで比較的少なかった年齢層の参加が見られたことが、アンケート結果から読み取れた。令和8年度は対象の学校を拡大し、宮城野区内の高校6校にまつりへの参加を呼びかける予定である。

委 員 地域の高齢の方からは、「買いたくなるような珍しい物がない」、「露店の金額が割高に感じる」という声が聞かれており、名産品や特産品を売っているとしても、その魅力が来場者に伝わっていないようである。また、親子向けのコンテンツが多い一方で、一人で会場に行っても目当てとなるものが少なく、ゆっくり休むところも無いとの声もあった。こうした点については、工夫の余地があるのではないか。

説明者 みやぎの・まつりでは、食事ができる場所として他都市交流と露店の2つのコーナーを用意している。令和7年度は他都市交流コーナーに出店予定だった1店舗が急遽出店出来なくなったため、例年よりも出店数が少なくなった。また、露店については地元の非営利団体の方をお願いしているため、一般的な華やかなイメージとは異なるかもしれない。他のコーナーも含めてまつり全体で魅力のある雰囲気を作れるよう工夫していきたい。

(9) みやぎの・まちづくり若手人材育成支援事業（担当課：宮城野区まちづくり推進課）

<質疑・意見>

委員 コミュニティフォーラムの経験者として、このような事業は将来の人材育成のために非常に良いことだということは重々承知している。今回、メンバーとして参加したのは結局何人だったのか。

説明者 当初の募集段階では人が集まらず、追加募集を行ったところ3名の応募があったが、最終的に継続して参加したのは2名だった。今回の反省の1つは事業のスケジュールが挙げられると考えている。4月当初にチラシ作成し、中旬から募集開始、5月に締切というタイトなスケジュールで各団体や学校に案内を送付した。その結果、募集対象となる学生が、前年度から既に他区のまちづくり活動に参加しているケースもあり、当区としては出遅れてしまったという印象があった。令和8年度は、高校生を対象とした企画の募集をするが、12月頃から各高校を訪問し先生方に説明を行うなど、参加者確保に取り組んでいるところである。

委員 収支決算書の「現地イベント運営費」について教えてほしい。

説明者 本事業は業務委託により行っており、委託先がコーディネーターとなって、現地イベントの企画運営や学生が参加する会議等の構成を担っている。これらの業務に係る費用である。

委員 次世代の担い手という観点ではどうしても必要な事業ではあるが、宮城野区においては、対象となる若者が地域の活動との繋がりが十分でないまま進んでしまっている点が1つの懸念事項だと思う。例えば、町内会長やみやぎの区民協議会からの推薦を申込条件とする方法も考えられ、その方が宮城野区らしさを出せる。各町内会や団体の中から、「この人を育成事業に参加させたい」と思わせるような仕掛けを少しずつ作っていくのも有効ではないか。

説明者 次回このような企画がある際に検討したい。

委員 参加者の年齢制限はあるのか。

説明者 令和7年度（第3期）は18歳から20代までとしていた。第1期は40代までを対象として募集していたが、幅を広げてもいいのではという意見を踏まえ、第2期は50代までに拡張した。その結果、世代が広がり過ぎて会話が難しいという場面も見られたため、第3期は20代までに限定したという経緯がある。

令和8年度に高校生育成に焦点を当てた意図としては、高校生が大人になって「まちづくりに携わりたい」と思い立った際に、相談先として、みやぎの・まつりに参加している地域団体や活動を通して知り合った方々を思い出すきっかけとなることを期待している。

委員 ターゲットによって募集の仕方も変わってくる。仙台市で実施している女性リーダー育成プログラムのように、ある程度年齢や性別などのターゲットをしっかりと決めて、募集をする必要があるのでは。

委員 単に広く案内を出して募集するよりは、町内会等に個別に呼びかけていった方が集まりやすいのではないかなと思う。

説明者 募集の際は、みやぎの区民協議会の会員や連合町内会に文書を送付するほか、学校や市民センターにまちづくり活動に参加したい方や興味がある方はいないか、個別に声をかけていた。

委員 現在、30代から50代のまちづくりの担い手がすっぱり抜けている状況である。その課題を意識することと、未来への投資という観点をどのように切り分けていくのか、宮城野区の課題とどう向き合うのかを考える必要があると感じている。

とはいえ、現在、台原森林公園では、小中学校の時に公園でよく遊んでいたことをきっか

けに、大学生になった同級生たちが再び集まり、イベントを復活させて公園を盛り上げようとする取り組みが行われており、希望が持てる事例である。こどもたちに対する事業は様々ある中で、それらをどのように接続していくのか、20代や30代の若い世代を巻き込みつつ、多忙な40～50代に対しても仕事の合間にまちづくりに関わることができる接点を作ることが大切ではないか。そのうえで、様々な年代や境遇の方に対してアプローチを行いながら、横の繋がりや新たな関わりの導線を生み出していくことが、まちづくり推進課の役割として担っても良いのではと考えた。

今後も試行錯誤しながら、宮城野区らしく継続してもらいたい。

4 閉会